

山谿に生くる人々

——生きる為に——

葉山嘉樹

青空文庫

何たる事であろう。

大山は、大山の兄の死を待っていたのだ。という事を十数年後の今になって、ハッキリ知ったのである。

大山は、その二人の子供が死んだ、という知らせを受け取ったのは、木曾川の落合川の発電所で働いている時であつた。

そして今、十数年後、木曾駒ヶ岳、恵那山などの山によって距てられる、天龍河畔の鉄道工事場で、今度は叔母からの通信で、兄が朝鮮で死んだ、ということを知ったのである。その簡単なハガキには、兄が朝鮮で死んだことを書いた後、「長男は盲腸で入院、他の子供たちは、それぞれお寺で、御厄介になつて居ります。両親のない子供たちは実に可愛想です。どこを見ても、子供の多い人ばかりで無理もいわれませんので、閉口しました」とだけ書いてあつた。

大山は、丁場を休んでいたのです、そのハガキを見ると、すぐに叔母に返事を出して、飯場の暗がりの中に、仰向けに引っくりかえつた。

——ああ、兄貴もとうとう死んだのか。朝鮮で——

と、悲しみも伴わない追想。それはもうすっかり疲れ切って、ミイラにでもなってしまったような、過去の追想の中に陥った。

大山は十数年前、亡き^な二人の児の夢を見続けた。そのために、生来好きな酒が、量を殖やした。どんな思いをしても、大山は酒を飲んで、麻痺したような状態になって、泥酔の睡りを買った。

そのためには、その後もらった女房のものはもちろん、それとの中にできた二人の子供の、着物までも、屑屋に売ったりして、あるいは、「殺人焼酎」かもしれないことを、承知の助で呷ったのである。

夢の正体というのは、子供の死因が分らないところから来ていた。

分らないものの正体を掴みたい、という事は何という苦痛であろう。もし、人間が、どうしてもたった今、人間とは何ぞや、という問いに対して、たった今解答を与えたいと焦り始めたら、そいつは無限地獄であろう。

知ったところで、どうなるものでもない。子供たちが、どうして死んだか、それを眼の当り見ないだけでも、幸いだというものではないか。もし、眼の当り、子供が道傍の肥溜

の中に逆さに落つこちて、死んでしまったのを見たり、なぜともなしに、瘠せ細って死んで行くのを、手の施しようもなく見せつけられたりしたら、それこそ、堪えられない事であらう。

そして、眼の前で死ななければこそ、そういった憶測も湧くのであらうが、それかと言って、現実には、そんな風な幼児の死、が絶無であらうか。

一つ夢、同じ夢を見続ける、というのは、医学上、どんな風な精神状態であらうか。

大山は、「両親のない子供たちは、実に可愛想です」という、ハガキの文句のために、十数年前に、ひどい努力と、アルコールの力で、忘れかけていた、永久に知る事のできない、子供たちの死因と、その死因についての想像の、無数の場合から来る、一種の焦点のような夢を、ふたたび見続けねばならない羽目に陥ったのである。

大山は、人間は不幸に暮すために生れたものではない。なるだけ、幸福に暮さなければならぬ、と思っていた。

ところが、大山には、幸福より不幸の方が、度々多く訪れた。

兄が死んだ、というのは、過去の事である。が、それを知ったのは、今である。そして大山は実感を以てではないが、そのことから来る生活の疲れ、というようなものを感じた。

「何だつて、光線が下から匍はい上がるんだらう。すっかり世の中が憂鬱になるような、光線じゃないか」

と、大山は思つた。

二間位の広さで、花崗岩の腐蝕した白砂土が、太陽の直射に会つて、照りかえして、足の下から部屋に射し込む。庭の向う側は、低い軒から下四尺余りは、胡桃だの、杉だの、藤だの、濃緑色のために、暗い背景をしているのだ。

つまり上が暗くて、土だけが白いので、光線が下から匍い上がるのだ。

これは甚しく眼を疲れさす。そこへもつて来て、気圧が変である。ベンチレーターで、換気する以外に法の無い、汽船のダンブル（船艙）に似ている。

飛行機が稀に、天龍川上空を通る場合、爆音は聞くが、機影を認める事は至難である。エアポケットが、川面や、両岸の断崖へかけて出鱈目にあるのに違いない。

鉄道線路の工事場で、火を燃すと、煙は下に流れる。

光線が下から匍い上がつて、煙が上から匍い下がれば、世の中はすっかり、あべこべである。そのあべこべが、ここでは現実である。

このあべこべの現実、というものが、いきなり、ポカリと口を開いて、大山を呑み込ん

だのならば、大山はそれが常態であると思うであろう。

だが、それにしては、大山は過去を大風呂敷に一抔入れて、背負い込んでいた。その中味がまた、宝物を詰めてでもあるのならば、出して陳列のし栄えもあるうが、ボロと臭気と貧困と屈辱とが、詰っていたのだ。

そいつが、その大風呂敷が、真物の大風呂敷なら、追っかけられた泥棒みたいに、どこかの軒先きにだって、投げ出して、身軽に逃げ出すことができる。が、過去という大風呂敷は、瘤みたいと同じ皮膚の下に背負い込んでいる。おまけに、この過去の大風呂敷は、時々針の尖を出して、背中を突つつくのである。

——もうたくさんだ——

と、大山は、仰向けになつたまま、両手を首の下に入れた。

——考えたり、思ったり、感じたりすることが、そもそも不必要な事なんだ。見ろ、こは日本中で、一番昆虫の多いところだ、と言われている。昆虫は考えたり、思索したりはしない。だが、感じはするだろうなあ。じゃあよし、お前も感じっぱなしにしろ！

「痛いな」「ああ草臥れた」「ああ飲みたい」「眠いな」と感じたら、それっ切りで、打ち切つてしまえ。後を考えるな。くよくよするな。ぼうつとしてしまえ。——

そんな風に、ぼうつとしてしまえ、という風に考えていると、考えというのは、いけないものである。後を引くのである。

大山は考え続けた。

——ふん。俺は過去の大風呂敷を背負っている。が、この過去の大風呂敷は、位牌まで入ってるんだぞ。位牌は、こいつは風呂敷の中ではなく、血の中に流れてるんだな。骨の中にもある。してみると、俺は先祖代々の位牌と一緒に、俺だけの大風呂敷を背負って、すっかりあべこべに引つくりかえった、ここへ来て、生活のドン底に滓おりぎけ酒のように、溜り込んでいるんだな。おまけに、現に二人の子供にまで、もう相当な風呂敷を背負わせているんだな。はて、生活って奴は、そんなもんだろうかなあ。こうちゃんとした自分の家があつて、ちゃんとした生活の土台があつて、ちゃんとした目論見を立てて、その目論見の通りに生きて行けないもんかしら。たとえば監獄——そうだ。あんまり規則づくめでも、こいつは面白くないて。とにかく、俺は先祖の位牌を血の中に流し、そいつを毎晩アルコールで醗酵させてるんだ。先祖はみんな死んじまった。一人だつて生きてやしないんだ。おやじもおふくろも死んじまった。父方と母方の先祖は、ずいぶん死んだろうなあ。おつそろしい数だろうて。それが、とにかく俺んとこまでブラ下がつて来てまた二つ下に結び

つこぶがブラ下がつている。そうだ、何、大したこたあねえや。こういう混沌たる時代だ。俺一人が、何か人生を探究しなけりやならん、という訳はあるまい。

「人類を幸福にするためには、一体どういう風にすればよござんすか」

なんて、ヒットラーやムツソリーニや、西園寺公に、一々聞いて廻るつても、億劫じやないか。第一、物騒な時世だ。日本だけじゃないや。世界中が物情騒然たる時だ。そんな時世に「人類の幸福」なんて、とりとめもない事を、方々訊ね廻ってたら、慌て者があつたら殴られちまうだろう。それにしても、俺は、とりとめのない事ではなく、何か、とりとめのある、ものの考え方つてのはできないんだろうか。こう、きちんとした、理路整然たる、胸のすくような、快刀乱麻を断つてえな風な、「ネー、テー、ドーン」といった調子で、断々乎として、生きて行きてえもんだ。俺なあまるで、生みつけられたから、それで仕方なしに生きてる。どうにか生きてる。とにかく生きてる。止むなく生きてる。てな具合だ。畜生――

「痛えなあ」

と叫ぶと、大山は急に飛び上がった。

大山の足に、本来、馬につくべき、ツクツクボーシほどもある蛇あづが、血を吸いかけて、

その鋭い嘴を刺したのだった。

「畜生！ 間違えるな。馬たあ違うぞ」

と、大山は大声で逃げ去った虻に、怒鳴りつけて、刺跡に唾をつけた。

「どうしたんだい。^{むか}で百足でも刺したんか」

と、由公が言った。

「百足なら理屈があるが、虻の野郎がよ」

大山の子が学校から帰って来た。今年から小学校に上がったのだが、何しろ、天龍川の川っ端から、大赤石の裾の、高原地帯まで一里半の峻坂を登って行くのだから、これは文字通りの登校であつた。

遅生れの八つで、東京育ちの子供には、この登校は体力に応え過ぎた。したがって、一日行つては二日休む。といった日が続いた。

続いて出かけると思うと、途中から泣いて帰ったりした。

「武ちゃん、足を出して転がしたあ」

「大きな子が、何もしないのに、殴つたあ」

「本が失くなッたあ」

「遅くなっちゃッたあ」

などと言つて、急坂を泣き下つて歸つて来るのだつた。

「本が失くなつたつて、どこで失くなつたんだい」

「どこか、道の辺で失くしちやつた」

「どうして失くなつたことが分つた？」

「どうしても」

——ハハア、野郎、学校へ行くのが厭なもんだから、どっかで読本を捨てたか、草ん中へ隠したかしやがつたな——

と、大山は考えた。

「『どうしても』つて、おかしいなあ。家を出かける時には、チャンと入つてたんだし、馳けたつて飛び出すようなはずはないし、ほら、こんなにきつちり入つてゐるだろう。引つ張り出すんだつて、よっぽど、力を入れなけりや抜けやしないじゃないか。それが失くなつたてなあ、おかしいじゃないか」

と言うと、タア坊は、飯場の入口に立つたまま首を傾けた。

——自分でも分らない——

という恰好なのだ。

「探しといて」

と言うと、ランドセルを置いたまま、また小川沿いに急坂を上って行つた。

大山は何とも言い表し難い氣持に囚われた。飯場から学校までの、一里半の峻嶮な上り一方の坂道は、同時に、峻嶮なる児童の社会生活である。そこでは、この八歳になるか弱い子供は、一個の独立人としての生活を営まねばならない。その各々の子供たちは各々の異つた家庭や、育つた環境を持っていた。

ある者は飯場頭の子であり、ある者は親方の子であり、ある者は労働者の子であつた。またある者は宿屋の子であり、会社員の子であり、小農の子であつた。

その各々は、一々生活のやり方が違つていた。そこでは道德の基準が、まだ一定していなかった。文化程度が不揃いであつた。それでなくても子供たちは、冒険を好み、変化を好んだのに、その親たちの中には、兇暴な日常生活を営む者もあつた。

そういう訳だったので、大山は、その子供を、自分自身の意の通りに、通学させるといふ考えを放棄したのだつた。

読本を「探しに」行った子供は、「なかった」と言つて歸つた。

「じゃあ、いいから好きなようにして遊びな」

と、大山は言つた。

——長い生活だ。その上苦しい生活だ。健康さえ許せば、六十年も八十年も生きなければならぬ生涯だ。その長い峻^{けわ}しい生涯を、この子も、「幸福」を探して歩くんだらう。蛭^{まむし}と蝮^{まむし}の眼玉を間違えて、噛みつかれるように、幸の代りに不幸を掴むだらう。自由を求め、ひどい拘束を食うだらう。俺が思い出して、俺の生活の中から「幸福」を摘み出そうとすれば、恋も結婚も何もかも消えてしまう。仄かに残るものは、「おやじもおふくろも、俺を叱らなかつた。寝ている間に枕元に果物を置いててくれた。俺は枕頭に果物のある夢を見て、手を延して、ほんものの果物を掴んだ。そして、それにかぶりついて眼が覚めたら、おやじとおふくろが、枕頭に坐つてて、俺を見て微笑したっけなあ。三つ位、いや四つ位の時だった」そんなのが俺の幸福だったと言え言えるだらう。俺も、子供に、子供が子供である間だけ位、自由にさせといてやろう。俺が死んだり、子供が一人立ちになれば、もう、自由も幸福も、そんなものはありはしない。生活があるだけだ。思い通りにならない、いやな時でも顔は笑つていなければならぬ、歪んだ、卑屈な生活が、あの

子をまた捕えるんだ。それでもいい。そんな生活にでも、病弱で乗り出させたくはない。うんそうだ。今の中に、山の中で、猿みたいに丈夫になれ。そして、勇敢に生活に打っつかって行け。――

と、考えて、子を山に放った。

その日は、暑中休暇に入る、最後の日であった。

ランドセルの中に、休み中の練習帖だの、父兄への休み中の心得だのと一緒に、児童通信簿が入っていた。

それを大山の嬪^{かかあ}が見ていた。

「栄養が乙よ」

と大山に言った。

「止むを得ないね。こいつあ、お前に似てるんだ」

「庶子よ。可愛想に」

「そいつも止むを得んね。先の女房が行処不明のまま、戸籍の上にガン張ってるんだからな。これも、お前の御存知の通りだ。手続きはお前に頼んであるが、お前もやろうとしな

いしね」

「これは、今度東京へ帰ったら、何とかしましょうね」

「いいだろう。だが、人間、生きて行くのに戸籍の事を思いつくのは、一生涯に幾度もないからね。一等おしまいには、戸籍より先に、消えつちまうんだからね」

「のんきな事ばかり言ってるわ。一体どうする心算なのよ」

「何をさ。お前に委せるよ」

「委せられたって、私にはどうしようもないじゃないの。他所の池で鯉を盗む時にはね、バタバタ水を撥ねられると困るでしょう。だから釣糸に一升徳利の底を割ったのを通しとくんだって、鯉がかかったら、スーッと釣り上げるでしょう。すると鯉は一升徳利の中へぶるぶるつと引きずり込まれちゃって、バタバタも、パチパチもやれないんですって。それと同じだわ」

「ふん。そいつあいいう方法だね。天龍川で釣るよか、養魚池へ行って、その手をやるかな」
「馬鹿ね。あんたは。その釣られた鯉と同じだと言ってるんのよ。あんただけなら、そりゃいいかもしれないけど、子供たちが可愛想じやないの。タアちゃんだって、東京の方がいいなあ、なんか言って言ってるのよ」

「そりゃ、俺だって、どこかで、楽な生活ができれば遠慮しやしないよ。楽に暮さしてや

るって言えば、エチオピアにだって、連れてってやるよ」

「楽な暮しなんかしたいとは思いはしなくても、安心したいわ」

「誰だって安心に暮したいさ。だが、今、安心に暮してる人間が一人だってあるだろうか。今の時代に、安心して暮してるのは、幸福な白痴と赤ん坊とだけだ。安心して暮すどころではないんだ。どんなに苦しんでも、『暮せない』人間が、どぶの中のゴカイみたいに、押し重なって、ウヨウヨしてるんだ。そして、お前が俺にせがむように、世の中の女房という女房が、みんな自分の亭主は甲斐性なしだと思い込んでるんだ。そして、あつちでもこつちでも悲劇をでっち上げてしまうんだ。お前は俺を馬鹿で腑甲斐ないと思っている。その通りだ。すると、今度は俺が、誰か一番手近かな者に、その人間が、『もつと俺に親切』にしたらいだろうと思う。とすると、そいつが無限に拡がって行く。となるとどうなると思う。誰もが、誰かが、『もつと親切に扱ってくれたらいい』と思うってことになるんだ。ところが、今は、誰もが、親切に扱ってもらいたがってばかりいて、『親切に扱ってはやらない』んだ。なぜだと思う。そういう風に世の中の歯車が嵌まり込んでしまったんだ。そして錆びついちゃったんだ。いいかい、お前は俺を、馬鹿の見本みたいに言う。よろしいその通りだ。俺は、人間が便利のために拵らえた金のために、今になって逆に命

までも取られるようになって、そのためにまた、多くの人が、命よりも金の方を大切にする。それが俺は胸糞が悪いんだ。『ようし、そんなら、せめて俺だけでも、金の馬鹿野郎を粗末にしてやれ』と思つて、有りもしなければ当てもないのに、入ったら最後、悪妻よりも残酷に叩き出してやる。見るのも胸糞が悪いって風に綺麗サッパリと縁を切つてやる。ところがどうだ。悪妻だつて叩き出したら、自分で米を磨いたり、子供の面倒をみたりして、早速困らなきやならんが、金の野郎は、余り綺麗に叩き出すと、早速生活に困らねばならん。それで、お前から言われるまでもなく、金は何ともはや癪にさわるが、生活は活きてる限りしない訳にはいかない。子供に罪はない。子供が修学旅行の貯金を、学校に持つて行く時は、肩身を狭くさせてはいかん、と思うから、今後だね。癪にさわるが、少し待遇をよくして、『無茶苦茶に叩き出さない』位のところにしようと、内々、恥しい話だが考えているんだ」

大山は、山が抜けでもしたように、勢こんで喋舌つた。それは女房に言つてゐる、というよりも自分に言つて聞かせてるように見えた。

「いい傾向だわ。恥しがることはないわ。あんた一人で、金を軽蔑してみたところで、それであんたの値打が上がるつていう訳じゃ、あるまいし、結局、それで苦勞し続けるのは、

あんた自身だし、その上、あんたとすっかり同意見だという訳でもない、子供たちまで、その飛ばつちりを浴びなけりや、ならないんですものね。あんたも自分で言ってるんじゃないの。『俺はもう、子供のために生きてるんだ。若芽のために櫟くぬぎの切株が生きてるように』って、それさえ忘れなきやいいじゃないの」

「そう拷問の責め道具に、子供、子供って担ぎ出すなよ。佐倉宗五郎じゃあるまいし。

『子供のために』ってこともあるが、そこに一つ重大な問題があるんだ。子供のためにってことは、子供——つまり、子供等の時代のためってことであつて、絶対に、子供を出だし汁じゅうに使つてはいけないんだ。たとえば、今生きていて、そしてその子供がもう子供を持つてゐる、という、お祖父ぢいさん級の人間だ。その老人たちの多くは、やっぱり、俺の通りの看板でもつて金を大切にし、『子供のために残した』んだ。ところが、どうだ。その子供が、金を濫費するからといって、準禁治産者にしたり、ひどいものになると『勘当』したりするんだ。これでも子供のためだろうか。こうなると拷問だよ。犬の背中に棒を結びつけて、鼻っ先きへ牛肉をブラ下げるのと同じだ。子供のために金は残したが子供には使わさない。つまり舐めるだけは舐めてもいい。が食つてはいけない。いいかい、利子を舐め舐め生きてる分には差支えない。が、肉自体、元金を食つてはいけない、ってんだ。ここんことを

一つ、よく考えてみてくれ。早い話が、お前のおやじを例にとってみようか。いやな顔をするな、例というものは実感がないと利き目が薄いものだ。お前のおやじが、俺に何と言った。

『わしは子供のために、麦飯と味噌だけで暮して、財産を拵えた。田も畑も家敷もある。が、長男は使う事ばかり知って、殖そうとはせん。それでわしは勘当した。娘には婿をもらうて店を継がせようとしたが「お前見たいな素寒貧すかんぴんについて」駆け落ちしてしもうた。三男も、こいつどうせ、お前さんに仕込まれて、ロクな者になりはしない。わしは子供のために財産を残したが、子供は誰ももらってくれようとはせぬ』

と言ったじゃないか。『そんな御心配は要りません。わしがもらって上げます』とも言えんじやないか。で、俺は芯から同情したような顔をしていた。また、実際、その動機には同情するさ。子供の幸福のためには、泣いたって喚いたって、今の社会では、金がなかったら問題にならない。金を軽蔑なんかしていようもんなら、現在では、子供の幸福どころか、一家心中もんだ。だから『子供のために金』というスローガンはいいさ。だが、そのうちに、金が運よくチビリチビリでも貯り出すと、子供よりも金の方を大切に始める。終いには子供を勘当してまで、金を守る、という事になる。なぜかっていうと、子供って

奴は、金ほど便利に使う訳には行かないからなあ。金はちぎって出せるが、子供はちぎる訳にはいかない。金を出して女を買い酒を飲むが、その子もまた、自分で稼げもしないで女を買い酒を飲む、つてえことになる、最初の看板がグラつき出して来るんだ。浅ましいもんだ、たあ思わないか」

「冗談じゃないわ。あんたが金を貯めるなんて。借金を払うだけだって稼げやしないくせに、そんな変なことばかり考えないで、あつさりと稼ぎなさいよ」

「そうだ。あつさり稼げ、はよかった。お前としては傑作だ。だが、どうも俺は、あつさり稼ぐという性分に、生れついていないらしいんだ。恐らく俺は自分でも分らないだろうと思うんだ。ヒットラーに対して、俺が腹を立てている。こいつは、滑稽なことだ。だが事実だ。俺はヒットラーに対して腹を立てている。こいつは確かな事だ。何のために？

なぜだ？俺はヒットラー氏に会ったこともなければ、おまけにドイツまで行ったこともない。ドイツの大使館も知らない。ドイツ人も知らない。何だって、俺がヒットラー氏に対して腹を立てたんだろう。なぜだか俺にも分らないんだ。多分、こういうことになるんだろう。つまり、あんまり手近かな奴に対して腹を立てると、言い合いをしたり、まかり間違ったら殴り合いをしなければならん。そんなことはどうも面倒でいかん。何でも構わ

ないから、滅多に出かけて来て、ケンカを吹っかけそうもない奴で、大もので、面つきの氣に食わん奴に『腹を立てとけ』とでもいうことに、俺は考えていたんだろう。そうでも考えなければ、俺は、何だつて、ヒットラー氏に腹を立てたか、サッパリ訳が分らないんだ」

「馬鹿だわ。あんたは。卑怯者なんだわ。あんたは。腹を立てなきゃならない時には、いじけ込んでいて、あんたに何にも関係のない事に腹を立てているんだもの。わたしにも、どうやらあんたという人間が分りかけて来たわ。あんたは、ものを大きい事と、小さい事と、この二つに分けているんだわ。あんたは世間の事を、まるで怪我みたいに、大怪我と、ちよつとした傷と、位に分けて考えてるんだわ。だから、大きな出来事についてだけ、あんたは興味を持っていて、小さな傷を打つ捨つとくのよ。だから、小さな傷から命とりの破傷風が起こった時に、慌てて騒ぎ出すんだわ」

「うめえことを言やがるなあ。信州人は理屈っぽくつて、頭がよくつて、小ぢんまりしてて、なんて聞いてたが、天龍へ来て、半年経つか経たんのに、お前はそれ程頭が良くなつたかなあ。そんなに信州の山の空氣は頭にいいのかなあ。こいつあうかつには、東京へ歸られねえぞ。子供たちのためにね。だがお前が今言つた事はまったくだ。大きな出来事

だけを重大視して、小さな出来事を軽視してはいけない。これは真理だ」

そこへ、郵便配達夫が、封筒を叮嚀^{ていねい}に差し出した。

大山宛てに、友人から来たのだった。

封を切ると。

大山殿

Yより。

前略

本月は決算月ですから

是非々々数日中に御送金下さい

如何様お願いします

右

としてあった。

「なるほど、盆だ。こいつあいけねえぞ。まだ二口、三口、あるぞ。さあて弱った」

大山は、頭の中が熱くなった。彼は借金の催促の手紙を見れば、必ず頭が熱くなるのだった。頭が熱くなる、というのは、こいつは動脈硬化にとって、決して、いい結果を与え

るものではない。が、それにしても、金を、「俺だけでも粗末にしてやろう」という不逞な思想の、当然の結果だった。

「どうも、借金の催促状などというものは、血圧を高める作用があるね。借金するという事実は非常に健康な事だが、催促状になると、もう不健康になるて」

と、大山は濡れ手拭で鉢巻をしながら言った。

昼飯の漬物を上げていた女房は、

「して見ると、あんただって気になると見えるわね。良心が残ってる証拠だわ」

「変な時に褒める^ほない。ますます氣持が滅入^{はてん}つちまわあ」

大山は、半纏^{はんてん}を脱いで、禪^{ぜん}一つになって、隅つこの暗いところへ、這って行つてゴロリと横になった。それはまるで、その手紙が、当の本人で、その目から逃げるためのものであった。

大山が、暗がりで寝転がつて、借金の返済という個人的な事実から、

——俺が奴に返せないと、奴は、奴の借りを返せない。すると、そいつがまた返せない。とすると、どうなるんだ。そいつをトコトンまで押して行ったら、ふんだんに持つてる奴が、返されなかった。暫く、辛抱さえすればいいってことになるんじゃないか。ええと——

と、その考えを突き詰めようとする、板壁一枚隣の飯場の婆さんの、カン高い饒舌がうるさく耳につき出した。

「何でも、孕んだとか言うんで、警察へ引張って行つて調べる、とかいう話ですよ。三人だとかつてんですがね。そうかと思うと、ナア二、押つけられたんだという噂もあるし」
「あつちの方は、人間が多いから、そんなこともあるんですな」

と、男の合槌を打つ声が聞えた。

「灯台下暗しですよ。こつちだつてあるんだけどね」

「ほう、こつちにもね」

「こつちだつて、そりや一つや二つじやありませんとも」

イツヒツヒ。アツハツハ。と、男と女との四つ五つの笑い声が、入り混つて起こつた。

大山は、借金の事も、借金が社会との、どんな繋がりになっているか、それから、どうして、ヒットラーまで繋がっているか、理解し、説明する事はできないにしても、感でも探ろうとした、その想は、引つ掻くような猥らな笑い声で打ち切られてしまった。

——ああ、あそこには、本能だけの世界がある。情痴だけの世界がある。与えられて習

慣の軌道の上に乗つかかって、押されるままに動いて行く人々がいる。幸福は、あの人々のみの享け得るものだ。

「俺の色男を取りやがって。出て来い」

という冗談じみた女の声が聞え、続いて、数人の口々に喚く声が起こり、釘箱を揺ぶるような聞き取れない騒音が、引続いて起こった。

大山は、その頭がますます、熱くなつていくのを感じた。堪らなくなつて、立ち上つて、押上窓を上げて、支っかい棒をかつた。

と、一坪に足らない鶏小屋、風呂場、その下の便所、その下に流れる天龍川の灰色の濁流が目に入った。

満目、濃緑と白と灰色であつた。対岸の山は緑、河原の石は白、流れは灰色だつた。それ等の見倦きた風景に眺め入つて、頭の中に熱く煮えくりかえる、得体の知れぬ想いを追つ払おうとしているとき、また一つの思いが、意地悪く頭の中に忍び込んだ。

それは植付時の事だつた。

ほとんど全体が滝から成つていと言つてもいい、谿流から水を引いて、苗床を拵らえ

るために、山間農民の忙しい最中であつた。

飯場の便所が、オーバーしそうになつたので、そいつを三尺ばかり低くなつた、川堤の方へ移転したのだつた。

そこへ、その便所の角を廻つて田へ水を引くための溝を作り、四人の農夫が来た。そして四人は、何かヒソヒソと重大な相談でもするように首を集めていた。

話が煩雑になるので、端折るが、それは、「溝を作るのに、便所の台柱が三寸か四寸、邪魔になる。その邪魔になる部分は、飯場の土地とは所有者が違う。したがつて、これは、他人の土地の不当占用という事になる。で、『便所を移転してもらわねばならぬ』」という事になつたのであつた。

そこで、農民たちは、その便所の最も近くに住んでいる小林という、飯場頭に、その言い分を持ち出したのであつた。

「柱が邪魔だつたら切りましょう」

一方は、土方で日本中を股にかけて歩き廻っているから、話は早くつけたい方である。

一方は、土地に生えついたまま、一生涯動かぬ樹のような農民である。気の長いこと無類である。その上、何かしら、彼等はドヤドヤツと、無遠慮に乗りこんで来て、大胆に奔

放自然に手を入れて、そいつを變形させ、人工的な力学的な美を創造する、土方というものに、一種の反感に似た氣持を抱いていたのである。

強烈な刺戟は、都會人にとつては悦であり、山に住む人々にとつては苦痛であつた。

大山が食事するために、丁場から飯場の方へ降りて行くと、田と飯場との間の狭い畦道で、小林が大きな声を出していた。

話を聞くと、農夫たちが、「柱が邪魔なら切りましょう」と言うのに対して、はつきりした返答をしないし、その氣分が、どうも切るだけでは満足でないらしい。何かその底にあるらしい。と、小林は大山に言うのだった。

「他人の土地を無斷で拝借したのが悪い、と言つていられるんじゃないか。そうでしょうか」

と、大山が訊いた。

「悪いと言うのじゃないが」

と、農夫の一人が答えた。

「はつきりしてくれ。はつきり。地代が欲しいんなら欲しい、とはつきり言つてくれよ。そう、ねちねちやられて堪るか。百姓にコミやられて土方で飯が食えるかい。冗談に土

方をしてるんじゃないやねえや。こう見えたって、太平洋と日本海を繋ごうってえ、国家的な事業をやったんだ」

「そんな乱暴な事を言うんなら、この畦道を通つてもらうまい」

「何、畦道を通るな！ 通つたらどうするんだい。面白え。通るなってえんなら、なおさら通つてみてえや。この野郎！」

大山は間に入った。

「止せよ。土方と舟方と喧嘩して、人間が仲に入つたってなあ、ありや昔噺だぜ。止せつたら兄弟。で、畦道を通るなって言われたって、宙を飛んで来る訳にもいきませんし、土地つてつても、一坪とか二坪とかいうんなら地代も出せますが、三寸角や五寸角じゃ、どうにも勘定ができませんですが、こうして戴けないでしょうか。無断借用を大目に見て頂いて、長い事ありませんから、酒一升買う、という位のところで、辛抱してもらえませんか。お互いに近くに住んでいて、眼に角立て合うつてのは、面白くありませんから、一つ、お願い申します」

「はあ」と、一人が答えた。「なあ、みんな、そんなことにしてもらおうか」

「よからず」

という事で、納まった事があつた。

板一枚隣りでは、まだ頭のとつぺんから搾るような笑い声がしたり、押し殺すような、懨るような笑い声が聞えて来た。

——どうすればいいんだ。何を目当てにして生きて行くんだ。何だ！理想は、いくらでも高く、遠くに置くことができる。そして現実、過去の習慣と、伝統と、それから本能とだけの重圧で、息もつけないほど、むんむんしている。ちようど、あの濁つた天龍川の水が、そのまま空気になりでもしたように、息苦しいじゃないか。農民も、土方も、メスの刃のような断崖の上に立っていて、上の方の空高く、理想というようなものを眺めようとすれば、眼は眩んで、断崖から落つこちてしまふ、とでもいうように、その立つた足許と、その足許の周囲の危険さに、心を奪われて、立ち疎^{すく}んでいる。そして理想とは？それについて一生涯考えようと、俺の借金が一銭たりとも減りはしないところのものだ。一銭も通用しないもんだから、誰も彼も、そいつを投げ出しちまつたんだ。ところが、誰も彼も一人残らず投げ出しちまつても、そいつはなくなりはないんだ。この厄介な、困った代物の正体は一体何だろう。今では、そいつは、足に縛りつけた鎖みたいなものだ。そんなものをブラ下げると、足に捲きついて引っくりかえってしまうんだ。だが、何だ

って俺はこんな愚劣な事を、飯場の中で考えねばならないのか。これは、借金の催促状が俺の頭の中で、細胞の間を気でも狂ったように、駆けずり廻ったから起こった妄想ではないか。そうだ。だが、朝鮮で死んだ兄は、俺のような理想は一度も持ったことがなかった。だが、やっぱり死んでしまったのだ。たくさんの子供たちを残して、何も分らない。ただ、生きて行けばいいんだ。あの睦公のように。そうだ、むつつぺえでもからかつてやろう――

睦子というのは、小林飯場の飯炊女であつた。この女は、何よりも屋根が嫌いであつた。二十七か八位の年増であつた。丸い顔の、あどけない顔立ちであつた。

「セーフティーバルプ」（安全弁）という綽名あだながついていた。

何でも、東京で一度嫁に行ったが、姑との折合が悪くて、四つか五つになる男の子を残して、別れてきたとかいう経歴を持っていた。

おっそろしく、物事を構わない女であつた。

「あれじゃあ、姑でなくなつて、音ねを上げちゃうね」

と、小林も音を上げた位だつた。

もつとも、「東京から女中が来る！」という噂が立った時の、小林飯場の動揺は大きか

った。男ばかりの世界へ、独身の女、それもまだ若いのが来る、というのだ。物事を深く考えたり、観察したりする事は、労働者たちにとっては億劫であつたが、若い女の、容貌や風姿、体臭などを想像することは、億劫などころか、大きな悦であつた。

お睦の足は、踵の辺に、冬は氷河の亀裂のような赤ぎれが口を開いていたし、夏になると白く膿んだような、水虫に変質した。

が、飯場の若い衆たちは、外国人みたいに女の脚から、美や魅惑を、発見しようとはしなかつた。

お睦を繞つて、小林飯場の若い衆の間に、親切競争が捲き起こされた。

一日の長い、十一時間または十二時間の労働を終えて、草臥くたびれ切つた肩に、重い橋桁を担いで歸つて、それを切つて割つて薪にするもの、その薪を、飯場の中の焚火の周りに立てかけて乾かすもの、そういう間接な好意でなく、いきなり睦ちゃんの、お尻を撫でる事によつて、意志表示するもの。

ことにこの恋愛競争に、大衆的な娯楽的要素を与え、レビュー化したのは、この年ちやうど、徴兵検査の年齢に達した、林田という小男であつた。

五尺には、どうも些と足りないだろう、と思われるほど、林田は短かつた。

「おい林田、検査場に行くと、入口んとこに縄が張つてあるんだ。五尺の高さんとこにな。引つかかる位の奴は別の口から、中へ入れるが、お前は、その縄の下を通らされるぜ。そして一等お終いに、司令官が言うぜ、『今日縄の下を、縄につかえずに通つた者は、大きな体格の良い女房をもらえ』つてね」

「ニキミ、シバラ」（馬鹿野郎）

と、林田は朝鮮語で言い返すのだった。この小男の愛嬌者は、朝鮮の労働者と、ことに親しかった。ともすれば、日本人労働者と、朝鮮人労働者は、言葉の自由な交換ができないで、反感は持たないまでも、親密になるという場合は、余り多いとは言えなかった。がこの小男は、特別であつた。というのは、この小男が最初土方になつたのは、朝鮮人の飯場においてであつたからであつた。

が、ただそれだけの理由でもなく、この小男は極く無邪気な、人に悪意を持たない性質から、誰からも憎まれる、という事がなかつた。

この若者の小男が、一日の仕事を終えて、飯場に帰り、一風呂浴びて砂埃や汗を洗い落とし、夕飯を済ますと、誰にも気づかれないように、お睦の白粉を棚から下ろし、それを顔中に塗りまくり、手拭で姐さん被りにし、それから、板壁に吊るしてあるお睦の着物を着、

帯を締めて、飯場の一隅に立てかけてある米俵の奥に隠れるのであった。

外のもつと年のいった、経験の多い兄哥連は、晩酌を一本やったら、おだを上げたりして、まだ土間の飯台から立ち上がらないのだった。

空っぽの胃の腑に一本の酒が、まるで吹きつけるように、浸み込み、それで一層食慾を刺戟された、若い衆たちは、驚くほど馬食して、それが済むと、もう眠くなるのだった。

板張りの一ヶ所が囲炉裏に切っており、そこへ、釜の下で焚き落としを入れ、寝るまでのほんの暫くを、追想に耽ったり手紙を書いたりするのである。

ちようどその時刻まで米俵の後ろで、息を殺して隠れていた、林田は、ハーモニカを吹き出すのであった。それは東京音頭であった。

すると、若い衆はもちろん、洗うために、箆の中に茶碗を入れかけた、お睦までが駆けつけるのであった。

「誰だい？ 隠し芸を、凄い奴を知ってるなあ」

という声がかかると、林田は、片手はハーモニカを離す訳にはいかないが、片手には、二月の天龍谿谷の、七十年振りの厳寒というのに、浚団扇を持って、手振り足振り、お睦ちゃんの変装で、舞台へ現われるのだった。

「ウヒヤーツ」

と、身もだえするような笑いを、お睦は上げて、飯場の蒲莫座の上を、転げ廻った。若い衆は、主役を林田に取られたので、といって、咄嗟にいい役の考えも浮ばないで、

ニヤニヤ笑いながら見入っていた。

が、お睦は一通り転げると、まだ喉の奥で、キュツキュと、茶碗でも洗うような、笑い声を出しながら、林田に飛びついて行つたのであつた。

何のために飛びつかれたのか、林田には見当がつかないので、この小男は本気に慌てちまって、逃げて歩いた。が、何しろ、顔中真っ白けに白粉は塗ってるし、女の着物は着ているし、姐さん被りまでしているので、花見時でもない、寒中、飯場の外に飛び出すという冒険は、できなかった。

とうとう小男の林田は、がっちりした体格のお睦に取り押えられて、隅の方に積んである布団の上に押しつけられた。そして姐さん被りの手拭をとり上げられた。

この遊戯が、遅くまで続けられると、林田は朝、顔を洗う間がなく、飯を食うとすぐ、丁場に駆け上がりなければならなかつた。

ちょうど、その時分、隧道と函渠とのコンクリが、毎日打ち続けられていたので、林田

は、顔に白粉を塗ったまま、コンクリート・ミキサの練台の上に、真っ先に飛び上がった、まだ量る必要もないのに、白土の袋の口を解いて、それを舟の中に空けるのだった。白土やセメントを量る役に廻れば、女よりも真っ白くなくても、不思議な事はないのだった。

「うまいところに嵌りやがったなあ」

と、その面白い思いつきを知ってる親方は、別な役に廻そうともしないで、林田に白土とセメントの量り方を委せておくのだった。

この遊戯は、約半ヶ月位は魅力があつた。で、いつも扮装は同じだが、筋書きだけが、少しずつ更えられて、たとえば頬被りをとるところを、帯を解くとか、東京音頭の代りに、伊那音頭を吹くとかして、冬の夜のメリ込むような寒さと、無聊ぶりようとを凌いでいった。

これは、この調子で行けば、小林の飯場は和氣霽々として、若い衆の足も止まり、楽しみもあり、各々の若い衆が、故郷に残して来た苦にがい、肉親の境遇も、幾分ばやけ得たであろう。が、そんな時代ではなかった。

つまり、お睦が若い女であり、朗であり、冗談好きである、というだけの間は良かった。が、誰も、お睦に、そんな状態ばかりいる事を強要する、という訳にはいかなかった。

お睦が、掃除や片付け事が嫌いで、山に行つて薪を取ったり、事務所に行つて米俵を背負つて来る事を好んだから、といつて、一口に言えば男のする仕事を好んで、女のする仕事を厭うといつたからとて、だからお睦は女でないという事にはならないのだった。

お睦は、土方もやれば坑夫もやるし、鍛冶屋の真似だつて、一通りはやるといつた風な、兄哥株の笹本と、どうもくつついたらしかった。

笹本は三十そこその年輩で、女のように優しい顔立ちであつた。なぜだか、人の目をジツと見るといふ事がなく、いつもうなだれていて、この地上には、真実の愛情というものは無い、と思ひ込んでしまつた、といった風な、取りつく術も、慰める法もないような、寂しさを湛えた男だつた。

このよるべのない、寂しい男が、お睦を得たことは、慶びに堪えないことだつた。が、それを單純に喜ぶためには、笹本とお睦とだけが、他の多くの人々から離れていれば、それで問題はないのだったが、困つたことには、お睦に目をつけていた者が、もう一人居たことであつた。

「乞食も思わしくないから土方になつたんだ」

などと、冗談を言う位に、この社会には、捨てっぱちに落ちぶれた者も、沈み込んでい

る。それはちょうど、鍛冶屋の金敷の台木の中に、いつの間にか鉄屑が蔽り込み、沈み込むのと同じく似ている。

金敷の台木から鉄屑が浮かび上がれないように、多くの土方の中には、それから浮かび上がれない約束に縛りつけられたような者もあった。それも、それが数多く！

坂田も、そういう風なタイプの土方であった。もう四十に間もあるまい、と思われる年輩で、仕事も委しく、大抵の仕事には兄哥株だったが、たった一つの欠点があった。

それはまた一つの美点でもあるところの、「人が好過ぎる」という事だった。

それに、男振りが悪いという訳ではなく、脊も高いし、体格もよく、ボクシングの選手なんかよりも、もっと盛り上がった筋肉美を持っていた。ただ一つ、どうも少し上瞼が突き出し過ぎていた。いわば庇^{ひさし}が出過ぎていて、室の中が暗かった。

それも良かった。が、女に対して自信を持っていなかった。つまり図々しくなかった。そのためには、いきなり口説くとか、手を握るとか、尻を撫でるとかする代りに、目標を決めた女の前で、自己紹介をやらなければならない、という面倒な手続が必要だった。

ところが、坂田の自己紹介は、紹介の限度を飛び越して、自分褒め、自惚れになってしまったのだった。「それ位の事は、許してやらなければ、坂田は生きて行く空はあるまい」

と、仲間たちは、皆心の底から深い同情を以て聞いていたし、毎々の者は聞く振りをし、外の事を考えていてやったのである。

ところが、お睦は坂田の自己紹介が気に入らなかったのである。

もともと、後になって、これは坂田も、お睦も、二人が一緒になりでもしたら、大変なことになったであろう。と、覺つたらしく、坂田は、「あんなやりっ放しのお喋舌を嬢にしたら、それこそ一生の不作だったよ」

と言ひ出して、すっかり諦めて、お睦が、男から男へと追っかけ廻るのを、嫉きもしないで、ただ、不快そうに眺めていた。

お睦は「××は自分の絶対自由である」と確信していたらしい。いや、そんなことはまるっ切り考えなかったのであらう。そんな風な女がどうかするとあるものである。

笹本が、「一廻りして来たい。大井川の発電所に世話焼で使ってくれる口ができた」

と言つて、小林に暇をもらうように申し出て、その送別会なんかを開き、さて出発して後のお睦の様子には、まるで淋しいなんて風な気持は見出せなかった。それどころか、笹本がいる時よりもっと朗になり、燥ぎ出したりした。

それで、いろんな混線が起こつた。

「昨夜はお睦さんは、小野さんと、丁場の方へ上がって行って、二時間ばかり帰って来なかった」

「一昨日の晩は、大山さんと川下の方に、四時間も散歩に行つたのにねえ」

「じゃあ、笹本さんがいなくなったから、どこへも出ない時は、誰かときつとおかしいんだわ」

という風な会話が、山の神の連中の間に拡がり、折から留守にしていた、小林の女房が帰って来ると、小野の嬢が焚きつけられたり、大山の嬢が焚きつけられたりして、方々に小さな火花が持ち上がったのである。この小さな家庭争議の火花は、どうかすると、飛んでもない破綻にまで走ってしまうこともある。が、大したことは、お睦の場合では起きないで済んだ。

ここで一つ、面白い（面白いどころか不屈至極だと、叱る人もあるかもしれないが）エピソードを挿ませてもらいたい。

それは、嬢を忘れそなつた。というのである。

おやじも飲んだくれだが、嬢も飲んだくれで、どっこいどっこい、という土方の夫婦がいた。これは一緒になり立ては、さしつさされつアレワイサノサ、とか何とかで、至極、

ウマが合つたのだが、夫婦生活には、経済的な問題が重大になって来るので、だんだん暮している中に、お互に十分飲めない羽目になってしまった。

そこで、おやじは嬢をオツ抛り出して、汽車で、別な工事場へ出かけたのである。ところが、うちでへべれけになつてひっくりかえつてゐるはずの嬢が、へべれけではあるが、発車間際に停車場にかけつけ、亭主と同じ列車に飛び乗つたのだ。そして、亭主のシートの前に立つたまま、胸倉を掴まえて、

「嬢を忘れる奴があるか」

と言うと、亭主は頭を掻きながら、

「せつかく忘れて来たのになあ」

と言つた。というのである。

こういう話は、さまで珍らしい事件ではないのだ。これが、お睦の場合であつたならば、喜んで「忘れられた」かもしれないのだ。

そのお睦も、とうとう暇を取つて、どこかへ行つた。「またちよいちよい遊びに来ますから」なんかと言つて、行つたところをみると、どこか近くの辺に、彼女らしい「穴」でも見つけたのであろう。

こういった風な女は、生活に後を残さないで、きれいさっぱりと、身を翻して行く。が、そこへ行くと大山だの、小林だの、世帯持ちは、生活の両側に紐がついていて、それが首に捲きついているのであった。無理に、処置をつけようなどと考えると、その紐が締まるのである。

だが、今、工事は進めている。小林の言ったように、日本海と太平洋とを結ぶ、非常な難工事が着々と進行している。

ハツパは、昼夜を分たず、天龍谿谷に木魂して、深い眠の枕を持上げる。

昨日は、手慰さみの最中に、四人の土方が連れて行かれた。

盆の休みが過ぎて、明日からはまた、レトルトのように、暑い労働が始まる。

天下の名勝と称する、天龍川畔天龍峡は、いわば天龍川が山岳地帯を、長々と突破する大谿谷のその小規模な玄関口である。

そこは、東京からか、または伊那盆地から、いきなり飛び込んで来た、観光客には、奇岩怪石の間を、天龍川が幅狭く食い込んで、流れて居るので、たしかに珍らしいに違いない。

が、それから、ふたたび足を下流に向つて、延ばすならば、山はますます高く、谿谷はますます深くなることを発見するだろう。そして、しまいにはいやになつちまうだろう。

「いつまで、この兩岸の山、この紆曲した濁流が、続くのだろう」

と、途中で心細くなるほど、川は山の間に、長々と沈み込んで流れている。

川舟が下り、そして曳っぱられて上がつて来る。

その川舟を仕立てる場所に門島というところがある。同じ名の駅のすぐ下である。

そこから、七八丁の下流に「緑屋」という、旅館兼下宿、たばこ、雑貨、酒、ビール、罐詰、菓子、鯉、等々、つまり何でもある店がある。

緑屋は、そこへ四十年前から、トグロを捲いていた。まったく、トグロを捲いていた、と言つても、非常に失礼に当るとは思われないような、急峻な、恐らく千尺もあろう山の真下に建つていた。

しかし、その山が、途方もなく急峻であるにも拘わらず、とにかく、四十年の間は、安全であつた。植物の密生に依つて、山肌が蔽われていたからである。

その緑屋の、十五六間位の上を、鉄道線路が通るために、山を切り取らねばならなかつた。「切り取る」と一口に言つても、普通の土ではなく、堅緻な岩であつた。

山の表皮を犯すために、草木を伐採したのは今から半年も前の事だった。次には岩石に穴を穿って、ハツパをかけるのだった。

真下に「緑屋」さえなければ、ドカンドカンと大ハツパで、山を崩せるのだったが、そうは行かなかった。

そうでなくてさえ、ハツパの石が飛んで、緑屋の屋根へ穴を明けたのは、一度や二度ではなかった。

そのたんびに、勝気で伝法肌な、緑屋のおかみは、表へ飛び出して、真上の山を見上げて、

「馬鹿野郎！ 気をつけやがれっ」

と、顔を蒼白くして、怒鳴るのだった。

大山は、ハツパの蓋をするような役目に廻っていた。

最初は路傍に捨てられてあった、古畳を拾って来て、導火線がシューツと音を立てて、燃え始めると、穴の上に畳を立てかけて逃げるのだった。

だが、穴が三本も四本もくられると、一人では間に合わなかった。

緩燃導火線であるし、いきなり爆発するものでない、という事を、百も承知していても、

一間位隣りで、灰白色の煙を勢よく吹いている、ハツパ穴の前では、そんなにのんびり仕事をしてる訳に行くものではなかった。

四本位の時は二人で火をつけて、それから古畳を立てかけて、ベルを振りながら、「ハツパだあ、ハツパだあ」

と怒鳴りながら、山の斜面を木の枝や根つこに掴まりながら逃げて行くのだ。そして、もう大丈夫と思われる辺で、樹の幹を盾にとつて、煙を吐いている、ハツパの穴の辺を、ベルを急調子に振りながら、見詰めるのであった。

それは一日に五回かける時でも、その各々の時に、心の引き緊まるのを覚えた。

ドーン、ドドーン、バーン

と天龍の川を挟む兩岸の絶壁に木魂して古畳を突き倒し、穴を明け、時には四五間も空へ押し上げるのだった。

古畳はすぐに役に立たなくなつた。しかし、この山間では、古畳の補給は至難であつた。で、古畳の代りに粗朶を針金で編んだ。樫の木の葉のついたままのを、かつきり畳一枚敷位の広さに編んだ。そして、切り取り面に水平に下から六七間の高さに、十番線（太い針金）を張り、それに五六間の長さで移動できるように、同じく針金を下げた。

そうしておけば、一々ハツパ押えを、断崖の下まで吹き飛ばされなくて済むし、ハツパ穴が五六尺の高い段の上に穿^くられても、上からハツパ押えを吊るしておけるのだった。

それは困難な作業だった。編粗朶が相当に重いのと、それを穴の上にうまく具合に蓋をするのには手間が取れた。が、ゆつくり手間を取つてゐる訳にはいかない性質の作業であつた。

が、編粗朶にしても、一二度やる中には、穴に直接当たるところは、樫の枝がザクザクに折れて取れて終うのだった。

その切り取り面に、六七本の穴が仕上がり、一々押えをして、点火して、ベルを振りながら、見るのは面白い。一度などは、張り渡してある針金が一本であるため、ドーン、ドーンと鳴って、狂った馬が後脚を蹴上げるように、押えを撥ね上げ、撥ね上げるうち、最後の一本の穴の押えが、「確かに少しずつた」と思ったがもうそうなっては、どんな豪勇の者も、「ハツパと度胸較べ」はできないのだ。

ドーン、ドーンと鳴ると、機関銃口が、こつちを向いてでもいたように、バラバラと、低く地を逼って、岩片が飛んで来た。大山たちは立ち樹を楯にとつていたので、何ともなかったが、他のト口を押している者や、捨場を搔いている者たちは、パツと首を下げた。

穴が、こつちを向いていたのである。

幸いに、負傷者はなかったが、鋭い刃をした岩片がたくさん落ちていた。

どういう訳であるか、ハツパが鳴つて、バラバラツと岩片が飛んで来ると、誰もお辞儀でもするように、ハツと前に頭を下げるのである。顎を突き出して上を向く者などは一人もないのだ。

こうして、トロの線路の敷けるだけの幅で、緑屋の上の切り取りを上流へ突っ込んで行つた。

ところが、その切り取りとこの切り取りとの間に、小さな沢があった。沢とは言つても、雨が降つてもようやく小さな流れをなし、降らねば、岩松や苔の下を潜つて、浸み流れる程度のもので、それが緑屋と、新屋という旅館の水源になっていた。

その年は天候がおそろしく不順だった。

梅雨期には、滅茶苦茶に照つて、体中の水気を焙り出してしまうほど暑く、土用に入ってから、ジトジト降つたり、涼し過ぎたり、麴室の中みたいに暗くて蒸し暑く息苦しかったりした。米の値が上がって、東北地方では、稲苗を植付けるか植付けないかに、「この年は蕨根や葛の根を早くから掘つておくがよからう」といった風な布令が出たなどと、噂

された。

そんな風な、乾燥した梅雨期に、緑屋の上の飲料水の沢に、掘鑿が突き当たった。

滑つこく、水で洗われた岩肌や、岩肌に生えた苔や、凹みに生えた菖蒲に似た草だの、一本のハツパで、跡も片もなくなつて、その後には、有史以来初めて光線を見るのであるかもしれない、地殻の内皮の一部分が、ザクザクになつて、ひっくりかえる。すると、この岩片の表面が無暗に拡がるものだから、小さな流れは下へ流れないで、岩片へ吸い込まれるのである。

すると、緑屋のおかみが下から上がつて来るのだ。

「水がちつとも来ないが、どうしたんですか。石垣の方へ廻しているのなら、今日はこちらへ落してもらいたいですが、半日やそこいらなら、辛抱するけれど、一滴も出ないで、一日中つてことになる、まことに悲しいので、お客様商売で、お客様に、風呂にも入ってもらえんことになるで」

大山は、緑屋のおかみにとつ捕まると、要求が無理でないだけに、返答にも困るし、対策に到つては、手も足も、どころではなく、水が出ないので、逃げ出そうとしたのだが、間に合わなかった。ハツパ押え係りだったものだから、押えをとり外しながら、

「いやごもつともです。ちつとも出ないですか。そいつあいけない。弱ったなあ。こう毎日々々じや、水のない方はもちろん堪らないだろうが、わしもたまらんですよ。今、下に行りて行つて、一つゆっくり御相談しましょう」

「そうして下さい。大山さん。死活問題ですよ。こんなことが続いたら、下宿の人も居てはくれなくなるし、私たち、乾上がつちまはねばなりませんよ。四十年も私たちはここに住んでいるんですからね。それが今になって水攻めに会おうなんて、悲しいですよ。大山さん」

と、この感情の強いおかみは、眼に涙さえ溜めるのだった。

大山は下に降りて行つた。

花屋の前にも、どこかの水力発電所の監督らしい人の、高級なバラックが建っていた。

その辺の田だの桑畑だのには、赤インクだの、黒インキだの、ベニガラを塗ったののだの、白色レグホンの、雛がたくさん餌を漁っていた。これは少し説明を要するであろう。

この深い谿谷にも、東京の夜店で売っているのと同じ、白色レグホンの、かえつたばかりの雛を、穴の明いたボール箱へ「詰めて」自転車の尻に載つけて、売りに来る商人があった。それは安い値段で売られた。そして、うまく大きくさえすれば、いい値に売れるの

で、方々の飯場でそいつを買ったのである。

だが、人間さえもが鶏小屋に類する飯場に住んでいるんだから、鶏と人間を同じ待遇にするという訳には行きかねた。そこで、鶏には眠る場所だけ、竹っ片やセメントの紙袋などで拵えてやり、昼間は、「自由に、勝手に、好きなものを食って、大きくなれ」ということにしたのである。

ところが、そのうちに、毎晩、鶏小屋で寝る鶏の数が、「殖えたり減ったりする」という事が分った。どこだって「殖える」分には差し支えがなかったが、減るという事になると、一日一日大きくなるのだから、穏やかではなかった。

そこで足に紐を捲いてみた。が、これも余り効力がなかった。赤い紐というものが、五十も六十も揃っていたり、布を裂いたところ、まだ使える裂を、そう無やみに使えるものでもなかった。その上、解けたり、汚れて見分けがつかなくなったりした。

止むを得ず、一番たくさん飼っていて、一番沢山減った、飼主が、一匹ずつ引つ捕まえて、スタンプ用の赤インクを、ベタベタと背中へ塗りつけたのだった。

こういう次第で、この谿谷の川面に近い、街道筋では各々様々の色をした白色レグホンが、餌を拾っているのが見受けられるのである。

「これを見て下さい。まるつきり滴も出ないでしょう。これじゃどうにも悲しくて」と、緑屋のおかみは「悲し」がるのである。

なるほど、上の沢から地に埋めて、長々と引かれた、笥の先からは、水は一滴も出ていなかった。水溜めの木桶にも、使い残りの水がごくわずかしが残っていないかった。水桶の下には二坪余りの池があつて、水が黒く濁つて、鯉が鈍く動いていた。

「それに、こんな風だと、今日中は鯉が持たないんですよ。こんな山の中ですから、鯉でも活かしておかなきゃ、活きたお魚なんて、外のは手に入りませんからね。これでも十五六貫匁入れているんですよ。困っちゃいますよ。外のものなら、何とか都合もつけますけれど、水だけはねえ。命の水っていう位でしょう。ほんとに悲しくて」

「どうも、天龍川のすぐ側に住んで、水に不自由するって法はないですね。だけど、こんな渴水つて珍らしいんじゃないですか。寒中よりも涸れてるんですよね。井戸は掘つても駄目なんですか」

と大山が、気の毒になつて、都合によつたら、井戸でも掘つてやらねばなるまいか、と考へながら言つた。

「そりやあね。掘れば出ない事はないでしょうけど、せっかくいい水が湧いてるのにね。この水は体にとつてもいいんですよ。うちに下宿してる人たちでも、二三ヶ月すると、きつと肥つて来るんですからね」

「そう言つてましたよ、新屋でも、湯に沸かして入ると、リユーマチに利くとか、とも言つてましたよ。何だかしかし余り長く飲み続けると、おかみさんみたいに、そういうやおやじさんもだが、また瘡せるんじゃないんですか。過ぎたるはなお及ばざるが如しつてね。新屋のオヤヂは、相変らず足が良くないようだし、どうです、おかみさん」

と、大山は氣持にゆとりができたので、まぜつかえた。

「口が悪い！ 性分は仕方ありませんよ、大山さん。あんただつて、^{たが}箍を嵌めたように瘡せているじゃありませんか」

「どっちが口が悪いんだか、箍を嵌めたたあ驚いたなあ、どうも昔の大砲みたいだなあ、木でできた。しかし、おかみさんはうまいことを言いますね」

大山はそう言つて笑つた。

その時、緑屋の前の道を、上流の方から十六七人の労働者が、口々に何か喚きながら駆けて行つた。

そのうちの一人は、長い竹の棒を二本と、それに布か何か捲いたのを担いでいた。

「何だろう」

「どうしたんだろう」

と、二人は腰を浮かして、表まで出た。

そこへ、以前、小林の飯場にて、白粉を塗ってお睦の着物を着ては、ふざけ散らしていた、小男の林田が駆けて来た。何でも、検査を受けて、暫く小林の飯場にて、それから上流の発電所の堰堤の方で、ジャックハンマーの稽古の意味で、働いているとかいう噂は聞いていた。

「おい、林田、暫くじゃないかい。どうしたんだい」

と、大山が立ち塞がるようにして聞いた。

「今、人間が二人、流れちやつたんだ。追っかけて行くとこなんだ」

「何だって、二人も流れたんだ」

「帰りだ、帰りだ。今はそんなことを喋舌つちやいられないんだよ」

そう言つて、小男の林田は、木の葉が吹きまくられるような恰好で、下流の方へ仲間の後を追つて駆けて行つた。

「おうい、林田あ待てよう。ちよつとだけ話を聞かせろよ」

と、大山は後の方の文句は、おかみへ聞かせるために言い添えて、駆けて林田の後に続いた。

——ものにはきつかけというものが要るもんだて——

と大山は、緑屋のおかみから逃げ出し得たことに、ほつとしたのであった。

緑屋から一丁ばかり下手に、小林飯場が通路から、ダラダラと二三間下りたところに建つていた。

林田がその手前の電柱の辺まで、駆けて行つた時、小林のバラックから、小林自身が通路へ上がつて来た。

「今日は」

と、林田が立ち止つて小林に挨拶した。

「どうしたい」

「堰堤の方で今働いています。たつた今、玉石が抜けて、下にいた仲間を放水路ん中に叩つこんじましたんです。一人は渦で巻きかえされて、上げましたが、も一人の方が流れちやつたんで、今、探しに行くところなんです」

そこへ大山も追いついて、話を聞いた。

「一人で抜けたんかい。あそこは随分高いじゃないか」

「いや、危いから抜こうとして、大分骨を折ったけど、どうしても抜けなかったんですよ。そこへ、下の方に足場を作らなきゃならなかったんで、二人やって来たんですよ。『ちよつと待て、この玉石を抜いてからにしてくれ』ってんで、二人がかりでやってみたが、どうしても抜けないんです。こんなにまでして、抜けなきゃ落ちっこないってので、『いいからやれ、大丈夫だ』と言うので足場にかかったんです。ところが、どうした弾みだか、その玉石が抜けたんですよ。」

『おうい、行くぞ、どけ、どけ』

つて上から怒鳴った時は、もう上の方にいた者の腰に、ぶつつかりましてね。そのぶつつかる瞬間に、そいつ手を高く挙げましたぜ。そうすると、その下にいたのも、やつぱり両手を高く、バンザーイ、とでも叫ぶ時のように上げてましてね、そして、玉石が上の者の腰を打つ瞬間に、二人は抱き合っていましたよ。それから石も、抱き合った二人も、瞬間に、あの放水路中にまくれ込みじまって、騒ぎになったんでさあ」

「二人とも流れちまったんかい。抱き合ったまま」

と、小林が訊いた。

「落ちる時には抱き合つてましたがね。腰を打たれた方はすぐ死んだらしいんです、だから、放水路を出外れた吊橋のところから、渦になつてゐるでしょう。あの渦んとこで、生きてた方の男は、一人で泳いで這上がつたつて、言つてましたよ。助かったかどうかまだ分りませんがね。腰をやられた方の男は、そのまま流れの底を、どうも押し流されたらしいんです。だから、今みんなで担架を持つて、下流に浅いところが一ヶ所あるでしょう。あそこへ見張りに行くんです。死体より先に行つてないと、あそこを越されたら、もう浜松から太平洋ですからね。冗談じゃない。もう兼山の丁場の先辺りを、ゴロゴロ川底に打ちつかりながら流れてるかもしれない。ごめんなさい」

そう言い捨てると、林田はまた転がるようにして、小刻みに駆けて行つた。

「野郎、ひどい野郎だ、徴兵検査に行くつてから、羽織の一枚も拵えるようにと思つて、勘定と一緒に小遣も持たしてやつたのに、帰つて来て、一日二日居たと思つたら、もうケツを割つちまやがつて、外で働いてやがる。面白い奴だから、どこへ行つても、可愛がられると見えるんだね」

と、小林が大山に言つた。

「若いからねえ。一つとところにじつとしてなんかいられないんだよ。金坊きんぼうには『おやじに金をもらってくれ』なんてって、頼んでいたんだそうだよ。検査で幼友達に会って、女の味でも覚えたんじゃないかい」

「また、川向いでは火葬だね。俺たち正月からこっち、幾つ火葬を見ただろうね」
「随分の数だね」

小林飯場の川向いに、この附近の村落や、工事場で死んだ者を火葬にするための場所があった。

両岸が高い山になって、峽になっている戸口みたいな、狭い傾斜面に、水面よりやや高く、長さ五尺、幅二尺、深さ三四尺に穴が掘られてあるだけだった。

その火葬場のすぐ上流は、発電所工事の砂やバラスの採集所になっていた。

棺は、釣橋を渡ったり、新らしくできた道路を通ったり、そのまだ開通しない個所から急に、山の断崖を河原に下ったり、バラス採集所の掘り残しの狭い高いところを通ったりして、火葬場まで行かねばならなかった。

チブスの流行った時などは、一日に二つ位そこから、濃い煙が上がった。その煙がまた、

風のないために未練氣に、いつまでも谿谷に立ち罩めて、川向いの飯場までも、いやな臭いを嗅がねばならなかった。

まだ寒い頃の事であつたが、前の日、小さな棺を、極く少人数で送つて来て焼いていたが、その翌日、朝早くから、その小さな棺の母親らしいのが来て、夕方まで、ほとんど、その穴の中に入りつ切りだつたことがあつた。

川向いの飯場でも、それに気がついて、「どうしたのであろう」と、みんな氣になつて時々見やつた。もういないかと思うと、穴の中からもうそうに頭を上げたりするのだった。多分、幼くして逝つた子の、どんな小さな骨をも拾い残すまいとしたのであろう。そして、冬の早い日没で、もう姿の見えなくなるまで、歸つて行くのはこちらからは見届け得なかった。

緑屋の飲料水の問題は、その日の夕方から雨になつたので、一切の水喧嘩の例に洩れずあつさり解決がついた。

が、今度は、緑屋の家屋そのものと、中にいる人間とが、「安全でないかもしれない」という状態になつた。

誰も、こんなことが持ち上がるとは、思いもかけない事であった。というのは、その切り取りの岩石に、断層というか、何というか、理^めがあつたのである。ちょうど山ほどある玉葱みたいに、山の岩石に層が入っていたのであつた。

その理の下の方を、ハツパで外し外し、進んで行つたので、下から支えるものがなくなり、山の圧力で岩石の理に添うて、上の山が「崩壊して来ないとも保証ができない」という事になつたのである。

これには、一同まつたく困り果てた。

まだ二ヶ月かそこら前にも、中位の柳行李位な石が、その切り取りから落ちて、そんなはずがあろう道理がないのに、急傾斜面を転がって、敷居位ならまだしも鴨居から壁、敷居を打ち折つて、そこへ居据つた、という出来事があつたばかりだつた。

その時は、鉄道敷地から、すぐ下の報償道路の上へ、そうつと落とそうという心算で、金挺でちよこつとこじたのだつた。が、その意地の悪い石は、報償道路の上で、ちよつと、考えるような風に、一二度のろのろと転がり、上流寄りの沢の方へでも落ちる風を装いながら、道路を外れるや否や、猛然と竹だの櫟の樹などに打つ衝かり、それに依つて回転を与えられ砲弾のように転げ落ち、家の上の崖先端で反動のため、約一間も高く撥ね上がつ

て、上述のような被害を与えたのだった。

そして、いつもその石の落ちた場所には、緑屋の一人娘の、みづほという、二十一になる愛らしい子が、裁縫をしているのだった。

だが、その最初の無作法な石の訪問の時には、みづほは炊事場の方へ行っていたので、人間には何の被害もなかった。

その時は、百方、謝罪して、損害を弁償することで勘弁してもらったのだった。

今度はそうは行かなかった。一つの石や、一つの岩ではなく、相手が山であった。

六月の初めだった。

早朝、仕事のかかりにはまだ寒かったので、焚火をして当った。

緑屋の上の切り取りは、今ではもう四五十尺も、山の臓腑が白く高く聳えていた。

その切り取りの断崖の上に、畳二畳敷位の玉石が、載っかっていた。玉石といっても、数十年かまたは数百年か、そこにじっとして坐っていたものだから、草だの灌木だのが、その上に生い茂り、苔むしていた。そして、それが、下の山を形造っている岩磐の露頭か、または独立した玉石であるか、という事は、一目瞭然とはいかなかった。

どちらも「神様」を以て任じている、二人の坑夫の間でさえ、「露頭だ」「いや玉石だ」という風に意見を異にした位であつた。

いずれにしても、その切り取りは、もう少し深く山の内部へ向つて、切り込まねばならなかつた、とすれば、どちらにしても、その玉石めいたものは、「目の上の瘤」であつた。そいつが、山と一緒に崩れて来たら、もう緑屋もその前のブラックも、てんで問題にはならないのだった。

で、下の方から切り込む前に、その断崖上の玉石に穴をつくつて、軽いハツパをかけた。ところが、この玉石奴、数百年甲羅を干して眠つてたところへ、いきなりハツパをかけられたので、ひどく驚いたものとみえて、拳骨大の涙をバラ撒いたのだった。

その一つが、またぞろ、緑屋の屋根へ落ち、御町嚙に、屋根から天井まで打ち抜き、菓子並べてある箱の上まで、落ちて来て、硝子板と菓子とを、グチャグチャに、一緒にしたちまつたのである。

ちようどその直後、大山はブラック街の方に用事で出かけた帰りに、緑屋の前を通つた。「大山さん、大山さん」

と、緑屋のおかみは、勝手の方から、大山の姿を見かけると、大声で呼び止めた。

「ハイ、また水が止まりましたか」

と大山が冗談に言うと、

「水どころじゃありませんよ。これを御覧なさい。何とか徹底的に防備してもらわなければ、工事を中止してもらいう以外にありませんよ。屋根を打ち抜いて、天井を打ち抜いて、菓子の陳列棚を打ち壊して、商品をメチャメチャにするってな事になると、背に腹は代えられませんからね。責任者たるあんたは、一体どこをボヤボヤ歩いてるんです」

「や、こりやあ、どうも、えらい事をやらかしちやったなあ。あんなに設備してあるのに、どうして飛ばしやがるんだろうなあ。いや、どうも済みません。弁償しますから御勘弁願います。何しろ、坑夫に委せとくと、面倒臭がつて充分にやりませんからね。『ハツパをかけりや、石が飛ぶのは当り前じやないか』なんて捨っパチなのが居るんですからね。そりやあ、ハツパをかけて石が飛ばないようじゃ、かける必要はありませんがね。困ったことには、緑屋さんが、四十年も前からこんなところにガン張ってる事です。これが去年辺りから、バラックでも建てたつてなのなら、因縁のつけようもあるが、いや、おかみさん、あけすけに言っちゃまえばまあそんなもんですよ。屋根板や天井板は早速持つて来ますが、ね、おかみさん。菓子だのその箱だのは、私が食ったことにして、帳面につけとい

下さい。會計の時にお願いしますから、せいじや、屋根板をとって来ますからね」

大山は、もうしまいの方の口上は、外に出て行きながら喋舌っていた。

配給事務所から、屋根板を一束もらって、それを緑屋のおやじ、——それは乾物のかますによく似ていた——に渡し、「こつちでやるはずですが、今日は忙しいから一つ、お頼み申します」と言つて、大山は捲上の方の道から丁場に上がって行つた。

大山が、急峻な道を上り、半出来の線路丁場に頭だけ出した時だつた。

緑屋の上の切り取りの方から、「命がけ」みたいな大きな声が聞えた。

大きな声は、野丁場ではいささかも珍らしいことはない。絶えず怒鳴り、喚き、罵つているといつてもいい。それは必要からそうされるのだ。ものの一丁もあろうという河原から、丁場のウインチへ、「トロがトンボ（転覆）したから、捲くのを待て」というような場合、腹一杯喚かなければ、用が足りないのである。

だが、この時の小林の大声は、単なる大声でも、怒声でも、叫喚でもなかった。

大山が丁場にその姿を現わすと、緑屋の上の切り取りの辺が、何だか水の底でもあるように、ひっそりと沈み込んで、静かであつた。

そして、小林はその切り取りの真下から離れて、下流寄りの埋立ての方へ立っていた。

「緑屋へ、行つてすぐ外へ飛び出すように言つてくれ。山が来るんだ。山が来るんだ」
と、ふたたび小林は、耳なんかを素通りにして、じかに頭に響くといった風な、声を出して大山に言つた。

小林は物に動じない、腹の据つた男であつた。が、相手が「山」で、その上に、そいつが動き出して来よう、というのだから、その時は、ちよつと動じたらしかつた。

大山は、事の非常なるを覺つた。

それは、言葉を理解したというのではなく、小林が、崩壊する山を前にして、感じるであらう一切の事が、その短かい言葉と、調子とで、大山の全身を打つたのであつた。

大山はスイッチを入れられたモーターみたいに、その言葉と同時に、回転を始めて報償道路の捨場を駆け降りた。

無我夢中という言葉がある、あれと似た気持であつたが、言いかえれば、それは何かの理想を持った人間が、理想を一心に見詰めて、途中を省みない、という状態にも似ていた。「緑屋の人々を救わねばならない」

と、いう一念が大山の頭脳全体を領したのであつた。

だから、山羊でも犬でも駆け下りないような、急峻なところを、大山は一気に飛び下り

たのであつた。

大山は後で考えたのであるが、そういう場合の人間の気持は、雑念に悩まされない、という事であつた。日々の苦悩に満ちた生活、正義だとか、善だとか、そんなものは、この地上から姿を消してしまい、その上、虫のように「生きる」という、単なる事柄さえも、悪智慧を働かさねば困難な時代、そして、日々夜々、人間がそんな風な不合理な死に対して、無関心であり得るはずがない、残酷な「死」に対して、無感覚になっている時代。そして多くの人々は、もう、ものを考えようとさえしなくなった時代。

そんな時に、一分でも二分でも、カツとなつて、ただ一つ、緑屋を救わねばならぬ、という一つの気持に統一されたのを、珍らしい事だと思つたのだった。

「山が来ます。すぐ出て下さい」

と、大山は、緑屋に飛び込みざま、怒鳴るように言った。

「ハツパですか」

と、旅の人らしく、弁当を食べていた、二人連れの男が大山に訊いた。

「滅相もない。ハツパなんかじゃないんです。山が来るんです。早く出て下さい。話は外

でします」

と、大山は誘い出すように、表に飛び出して、

「山が来るんです。六十尺位の高さの山が来るんです。報償道路で止まらねば、この家は埋めちまいます。おかみさん、早く出て下さい。そして、こっちへ来て、山を見て下さい」

と、大山は、山のすぐ下になっている、奥の間に行つて、何かマゴマゴ探している、おかみに怒鳴つた。

おかみは、何か大切なもの、あるいは命よりも大切なものを探そうとでも、するように、暗い奥の間をウロウロしていたが、大山の、これも異常な響を持った言葉に、諦めたのか、見付ける事ができたのか、下駄をつつかけて表に飛び出して来た。

皆が飛び出したのを見届けると、大山は引返して、崩れ落ちようとする、山の下へ行くとしたが、その山の見える下の道まで引返して来た時、山から目が離せなくなった。

——上がつているうちに、山が来るかも知れない。——

と思うと、そこ——樅の木が茂つて、墓が少し立ち並んだ辺——へ、生えたように立ち尽して、切り取りの山に見入つた。

五秒、十秒、一分、時は極めてゆるやかに経って行った。

ああ、時というものは、ゆっくりする時もあるし、無暗に忙しがる時もあるものだ。失業者には癪に障るほど、時間はのろのろしているし、ようやく仕事にありついた者には、勘定日から勘定日への間には、時間は真空状態みたいに、早いのだ。ことに勘定日の時間の速度などというものは、それは、受取ったためしのある稼ぎ人でなければ、分らない話である。

焦れつたいような、粘りつくような時間の前に、ほとんど垂直に、山は、その皮を剥ぎ取られた岩盤を、白く、他の一面の緑の中に浮き立たせて聳えていた。

まだ動かないのだ。

動かざる事、山の如し、であつた。

だが、パラパラ、パラパラと、もう、五時間も前から、

「山が来るぞ」という警告は、山自身が発しているのだった。

大山の後から、旅の人は物珍らしさから、緑屋の者たちは恐怖と懸念から、椿の木の下に立つて、崩壊し来る山に見入った。が、緑屋のおかみだけは、ただ一念に山を見入っていることができないらしかった。

それは、山は半丁も離れて見れば、何等の危険も含んでは見えなかったし、よしんば見えたにしても、おかみの場合では、じつとしていられる訳のものではなかったであろう。

自分の店と、墓地との間を、幾度も行ったり来たりした。

「ウオツ！」

という、押し殺したような、呻き声とも、溜息ともつかない声が、見上げている人々の口から一斉に出た。

山が、ゆるぎ出したのだった。

それは山がユラユラツとしたのだから、人々の眼がグラグラツとしたのだから、その刹那には分らなかった。

が、続いて、鈍い響で大地が呻き声を上げた。それは人々の耳を打ち、足を顫わせた。

山は底鳴りをさせ、地響きを立てながら、要慎深く、慎重に、迂り落ちた。断層の理^めの一ヶ所に頑丈な突起があると見えて、その部分の中央を三四尺迂らして止め、その両端は下の部分から順序よく、鉄道線路の切り取りに崩れ落ち、そこに収容し切れない部分だけ、四五間の断崖を跳り越えて、幅二間の報償道路の軟かい路面へ、尖った頭を三四尺も突っ込み、その上へ上へと、線路をオーバーした「山」は畳み重なった。

そして、都合よく、それは下の方まで、転落しては来なかった。山の中央部の突起部が緑屋を救い、この工事を請負った親方をも救ったのであった。

が、その山の崩壊の全時間は、どの位の間かかったのだろう。それは一日分、いや二日分、いやもっと大きな心の激動を、小林や大山や、緑屋の者たちに与えたのだ。

だが、迂り始めてから、納まってしまふのには二分間とはかからなかっただろう。

「バンザイ！」

と、大山は、小林へ、両手を高く上げて叫んだ。小林は崩壊現場で、臨終の病人を看護る、医師のように、厳粛な顔をしていた。が、今、山が幸いにして途中で食い止つたことを見届けて、安堵したらしく、何とも言えない涙ぐましい微笑を見せたのであった。

それから大山は、緑屋の方へ飛んで行き、そこへ帰っていたおかみに、

「助かりました。大丈夫でした。御心配をかけました。何しろ無事で幸いでした」と言つた。

緑屋の前から、樹立を透して見ると、今まではずっと上の方にあつた、山の臓腑が、真上に覗き込んだように、近々と白く眼に泌みるのだった。

緑屋の人たちも、その前の会社員の家族の人たちも、街路に立って、「山が歩み寄る」

という事が、予想よりも大きな事実だったのに、今更驚いているのだった。

「おそろしかったですわね」

「どうなることかと思いましたわ」

とか、女の人たちは、小さな声で囁やき合っていた。大きな声を立てると、思い直して山がもう一度来はしないか、とでもいうように。

大山は、兎のように山に駆け登った。

小林も、その山をついさつきまで、鑿で穴を穿ったり、ボール（テコ）で起こしたり、つるはし鶴嘴で起こしたりしていた、坑夫たちも、まるで造りつけられたように、いろいろな恰好で、じつと見詰め、もの思いに耽っているように見えた。

まったく、それは無数の物思いであった。一つ事のつづまりがつかないのに、もう次の考えが頭を出し、次々、次々に無数の考えが、山に関してだの、生活に関してだの、突拍子もない聯想だの、星雲みたいな状態であった。それはまた、同時に一つの放心状態だったとも言えるであろう。

崩れた山は、何百貫、何千貫の巨岩や、尖ったのや、平ったいのや、砂や、土などに分散して、重なり合い、鉄道線路の掘鑿に一杯になって、土止めに残された岩塊を溢れ出て、

報償道路の防塞でかろうじて、食い止めていた。

しかも、それだけの山が崩れ落ち、人々を激動せしめたのに、崩れた山は、その上に、方々臓腑を露出しているだけで、他の部分には、上の山と地続きだった時と同じように、山の表皮を被り、その上には、何んにもなかったように、ツツジの樹が五六株、山椒の若樹が一株、盆栽にでも何にでもしてくれ、といった風に、風情よく生えていた。

風が、山が崩れたために出でもしたように、その小さな山椒の幹を揺った。

「天祐だったね」

と大山は言った。

何かもつと外に、いい言葉や表現がありそうなものだったが、大山はそう言った。

「人間つてもものは、不思議なものだね。いよいよ山が来るな、と思ってるうちは、まだほんとに山が来るな、とは考えていないらしいんだね。いよいよ来るな、とパラパラパラ、方々から砂が落ち、だんだんそれが数多くなり量が殖える、と、『もう駄目だ、いよいよ来るな』と考えるね。体中がなぜともなく、小刻みに顫えて、『どの位の山が来るだろうか、大きな奴だったら、もう一切おしまいだ、緑屋も押し潰し、埋め込んでしまうし、そうなれば、五十年近い俺の稼業も、これでひとまず行き止りというものだろうし、だが、

何とかならないものかな、何とかして、この山を止める法はないのか、まだ落ちてしまったのじゃないし、何とか方法はないのか、と考えたり、ワルや玄能や、ロープや、スコやノミなどを片付けさせたり、トロを押し出させたり、坑夫を山の上からも下からも引き上げさせたりして、さて、すっかり片付いてしまうと、この山は奇蹟でこのまま、食い止まるのじゃあるまいか、と思ったりして、いろいろ考えあぐんで、腹の決まらないもんだね。だが、山がユラユラツとして、地が呻いて、迂り出してしまうと、すっかり腹が決まるもんだね』

『山は来るんだ。成すべき事は成し、尽すべき事は尽した。山が来るんだ。緑屋を埋めても仕方がない。山は来るんだ』

と決心がついたね。決心がついて、山の迂る様、崩れる様子を、始めて冷静に眺めることができたね。いよいよ山が崩れるだけ、崩れ落ち、止まるところまで行ってしまうて、『緑屋を埋めなくて済んだ』という事が分った時、うれしい、とか、ありがたい、とかいう感じはなかったね。そんな利害得失じゃあない、別な感情だね、何と言うかね、崩れた山に、こう礼を言いたいような気持だったね。『どうも済まなかった』とでもね」

と、昂奮と激動の後で、心の底に涙でも溜めているように、小林は静かに語った。

大山は、なぜともなしに、涙ぐんでその話を聞いていた。静かな風情であり、心持ちであつた。

まるで、そこには、たつた今まで、何事もなかったような、寂しい静けさがあつた。

日常の、生活の重しからいや応なしに、焙り出されるような考えと、この山崩れの直後に、人を囚にするような考えとは、何というはげしい^{けいてい}怪庭のある事だろう。

山は一二分で、または十秒か二十秒かで片がついてしまった。が、坑夫たちも世話焼きもみんな二分、十分、三十分、その崩壊現場を立ち去り得ないで、転落して、山の一部から独立した石となつたの上へ、腰を下ろして断層に眺め入っていた。

何という見事な断層であろう。それはまるで自然石の巨大な墓石を思わせるように、二つこい肌を、三角形にほとんど垂直に立てていた。そして、その表面には、白粉でも塗つたように、白い細かい土を薄くつけているのであつた。

「これほど大きく来ようとは思わなかつたね。だけどおそろしいものだね。こんなに鬱蒼たる森林に蔽われ、永劫に揺ぎなく思われる大地の中の、しかも、岩盤の中にこんな理^めがあるんだものなあ。おそろしいものだなあ」

と、大山は静かに、小林に言い続けた。

「来るはずだねえ。たとい、僕等が、ここをまるつきり手をふれないでいても、何百年か、何千年の後には、きつとこの理^めから離れてしまうんだらうね。見給え、上の方から五間位までは、根っこが入っている。まるで荷物を縛る紐みたいに薄べったくなくてね、変化は徐々にだが、根強く行われているんだね」

「絶えず変つてゐるんだらうが、こんな風に山が来るつてな風でないと、俺達にや分らないんだらうか。こんな風に地響がして、どかつと来ると、誰にだつて分るだらうからな。緑屋のおかみ、憤つてやしなかつたかい。山なんか落つことしやがってつて」

と、小林が言つた。

「いや、極めて静かだつたね。気の毒な位だつたよ。部分的な震災みたいなもんだからね」
「そうかい、それは助かつた。俺はまた、今度こそはボロ糞に言われなければならない、と覚悟をしていたんだ、ハツパでボロ糞なんだから、今度は胸倉位とつかまれて、腕に噛みつかれるだらう、思つてたんだが」

と言つて、小林は始めて小さな声で笑つた。

静かな午後であつた。

天龍川には帆をかけた、川舟が上って行つた、雨が近いであろう。帆かけ舟が上ると雨が降ると、この附近では、言われていた。そして、その通りであつた。

太陽は、ゆっくりと中央アルプス連峰の方へ、歩いて行つた。まだ日は高かつた。

が、何かしら、大きな仕事を成し終えた時のような、安堵の心とうつろな魂の疲れが人々を捕えた。

川下に死体を探しに行つた、堰堤の方の人々は、まだ帰らなかつた。

川舟が上り、雨が降つて、眠れる天龍が、起こつて雲を呼び、雨を降らし、川底の石を転がすようになっては、死体の搜索は困難というよりも、至難になるであろう。

（昭和九年へ一九三四）十月「改造」第十六卷十一号・昭和十年一月へ一九三五）「改造」第十七卷一号）

青空文庫情報

底本：「葉山嘉樹 短編小説選集」郷土出版社

1997（平成9）年4月15日初版発行

底本の親本：「葉山嘉樹全集 第三卷」筑摩書房

1975（昭和50）年6月25日初版発行

初出：「改造 第十六卷十一号」

1934（昭和9）年10月1日発行

「改造 第十七卷一号」

1935（昭和10）年1月1日発行

※初出の表題は「山谿に生くる人々——生きる為に——」（「改造 第十六卷十一号」）、「断崖の下宿屋——山谿に生くる人々——」（「改造 第十七卷一号」）です。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※誤植を疑った箇所を、底本の親本の表記にそつて、あらためました。

入力：林 幸雄

校正：富田晶子

2018年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山谿に生きる人々

——生きる為に——

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 葉山嘉樹

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>